(様式第1号)

■ 会議録 □ 会議要旨

会議の名称	令和6年度芦屋市生活困窮者自立支援専門部会
日時	令和6年9月24日(火) 午前10時から正午
場所	芦屋市役所分庁舎2階大会議室
出席者	委員長 平野 隆之 副委員長 谷 仁 委員 新妻 佐奈江、藤川 喜正、三芳 学、山川 範、山本 眞美代、株本 就子、中島 匠、佐藤 菜穂子 欠席委員 吉田 督、有田 幸生、押場 美穂、上田 利重子、石田 享子、山田 弥生 オブザーバー 竹端 寛 委員以外 芦屋市社会福祉協議会 三谷 百香、黒田 樹里、今井 智美 三田谷治療教育院 中野 美智子、佐藤 久愛、山際 紘輝 グリーンコープ 須藤 崇史 山の子会 福嶋 浩 関係課 こども福祉部福祉室生活援護課 幾波 芙美代
事務局	こども福祉部福祉室地域福祉課 岩本 和加子、吉川 里香、堂ノ前 貴洋、亀岡 菜奈、島田 友美
会議の公開	☐ 公開 ----- ☐ 非公開 ☒ 一部公開 会議の冒頭に諮り、出席者10人中10人の賛成多数により決定した。 〔芦屋市情報公開条例第19条の規定により非公開・一部公開は出席者の3分の2以上の賛成が必要〕 <非公開・一部公開とした場合の理由> 配慮を要する内容を含むため議事(1) 参考資料の経過記録事例、(2) 地域まなびの場支援事業 の取組状況についてのみ非公開とした。
傍聴者数	1人(公開又は一部公開の場合に記入すること。)

1 会議次第

(1) 開会

【委員会の成立について】

開始時点で委員16名中10名の出席を確認

(2) 委員及び事務局の紹介

(3) 議事

- (1) 自立相談・家計改善・就労準備と社会参加の一体的実施について
- (2) 各事業における令和5年度の実績報告と令和6年度の取組について
 - ・自立相談支援事業
 - ・家計改善支援事業
 - ・就労準備支援事業
 - ・社会参加推進事業
 - ・地域まなびの場支援事業

(3) その他

(4) 閉会

2 提出資料

- 事前資料1 令和5年度生活困窮者自立支援制度実績報告書（案）
事前資料2 自立相談・家計改善・就労準備と社会参加の一体的実施について
事前資料3 自立相談支援事業における令和5年度実績及び令和6年度の取組
事前資料4 家計改善支援事業における令和5年度実績及び令和6年度の取組
事前資料5 就労準備支援事業における令和5年度実績及び令和6年度の取組
事前資料6 社会参加推進事業における令和5年度実績及び令和6年度の取組
事前資料7 地域まなびの場支援事業における令和5年実績及び令和6年度の取組
参考資料：経過記録事例1 一体的実施にかかる経過記録事例
参考資料：経過記録事例2 家計改善支援事業・就労準備支援事業の経過記録事例

3 審議内容

（事務局 吉川）

ただいまより令和6年度芦屋市生活困窮者自立支援専門部会を開催いたします。

開会にあたりまして、平野委員長から一言お願いいたします。

（平野委員長）

皆さん、おはようございます。

社会福祉法と民法が改正されるということで、成年後見制度利用促進の関係の内容が変わっていきませんが、これから1年半かけて改正に向けた検討会が始まっています。

約3か月に2回検討会がされており、恐らく今月末にも開催される予定です。その検討会で、大阪府阪南市の取組事例が報告されるようです。そのテーマが、漁福連携というテーマで、漁福というのは、漁業と福祉の連携ということです。農福連携は一般的に言われていますが、漁福連携は、なかなか例がありません。しかも、漁福連携で来ているのは、阪南市にある少年院の子どもたちなのです。国も地域づくりの中で、少年院の子どもたちが包摂されていくようなものを、全国に紹介したいという意図も込めて、その事例を選ばれたのだと思います。一体、漁業従事者の人たちが、どのような思いで取り組んだのか、とても関心がありましたので、漁業従事者と面談させてもらうために行ってきました。

単にボランティアや社会参加の一環として実施するだけではなく、商品開発も同時に行って漁港を活性化させており、色々な福祉の仕組みと漁業従事者の人たちをうまく取り入れた漁福連携の取組でした。

西鳥取漁港という漁港では、地元の小学生が地引き網の社会見学に来ており、地域づくりと福祉、あるいは子どもたちの教育、社会学習のことも含めて、とても良い取組を見学してきました。地区社会福祉協議会が非常に活発に活動しており、漁港のリーダーは民生委員、奥様は地区社会福祉協議会でずっと活動されています。

阪南市がしてきた何十年の地域福祉の取組が背景にあるということも含めた報告ですので、もし機会があればぜひ聞いてください。

本日は、様々な制度の取組とともに、社会参加を進めるような居場所や、働くことを支援するという意味を皆さんと共有し、芦屋の充実に向かって議論できればと思います。

また、本日は芦屋市権利擁護支援システム推進委員会の委員長をされている竹端先生にお越しいただいています。竹端先生、自己紹介をよろしくお願いいたします。

（オブザーバー 竹端教授）

芦屋市権利擁護支援システム推進委員会委員長で、兵庫県立大学の竹端と申します。平野委員長がおっしゃったように、生活困窮の話は重層支援や様々なものつながっているコアな部分があると思っており、私も他の自治体では関わっていますので、本日は勉強させてもらいに来ました。楽しみながら、色々とお話を聞かせてもらいたいと思います。よろしくお願いい

たします。

(平野委員長)

ありがとうございました。

本日は困窮がベースですが、先ほどお話した検討会では、民法改正して、成年後見制度そのものを改革するという動きになっており、今回の多機関協働推進委員会では、恐らく国も改正の方向性の案が出てくる頃だと思しますので、そのようなテーマを議論できればと思います。

(事務局 吉川)

ありがとうございます。

先ほど委員長からご紹介いただきましたが、本日は、芦屋市権利擁護支援システム推進委員会の委員長である兵庫県立大学の竹端教授にオブザーバーとしてご出席いただいております。

ここからの議事進行は、平野委員長、よろしく願いいたします。

議事(1) 自立相談・家計改善・就労準備と社会参加の一体的実施について

(平野委員長)

それでは、議事に入ります。事前資料2と参考資料の経過記録事例1、2を見ていただき、社会参加推進事業について議論できればと思います。

では、事務局からよろしくお願いします。

(事務局 亀岡)

事前資料2の上の図をご覧ください。

右上あたりのオレンジに近いカラーの部分が、就労準備と社会参加の一体的実施の支援メニューや、その流れについて図示した部分で、左下の黄色の枠囲み部分が、生活困窮者自立支援法に基づく事業との関連性を示しています。

もともと芦屋市では、生活困窮だけでなく社会的孤立など、様々な困り事や生きづらさを抱える方々への支援として、生活困窮者自立支援法に基づき、自立相談支援事業、就労準備支援事業、また令和4年度から家計改善支援事業を新たに加え、相互に協働しながら支援を実施してきました。

そこに、昨年度から重層的支援体制整備事業の中で、生活困窮にとどまらず枠組みを広げ参加支援をしていく必要があるときに、就労準備支援事業で取り組んでいる、「寄ってカフェ」やつどい場「くろまつ」といった居場所の部分に、就労準備の利用者だけではなく、社会的孤立やひきこもりの状態にある方など、社会とのつながりを持ちたいという方や、就労準備支援事業の終了後も居場所に参加したい方など、社会参加の機会を必要としている方がいらっしゃる事が分かりましたので、そこに社会参加推進事業を入れ、就労準備と社会参加を重ね合わせて層を厚くするという意味合いで、一体的に実施しています。

就労準備と社会参加の支援メニューは、基本的には同一になりますが、本人の気持ちや段階に応じて事業を選択することができるようになりましたので、対象者とのつながりやすくなるとともに、お互いの継続もしやすくなっていると考えています。

生活困窮者自立支援法の事業は、今までも自立相談を中心に、家計改善や就労準備につながってきておりましたが、現在ではチームとして支援を行う中で、そこに社会参加推進事業も加わり、家計改善からの方を就労準備や社会参加につなげられないか検討したり、就労準備の中で金銭的課題を抱えた方がいらっしゃったら、家計改善や自立相談と一緒に関わったり、また社会参加から入って、就労準備につながったりと、各事業間で様々な形での連携や協働が広がってきています。

それでは、実際に各事業関係でつながったケース、この図の中では参考資料ケース①、参考資料ケース②について、事業担当よりご説明をさせていただきますので、参考資料の経過記録

事例1をご覧ください。

(平野委員長)

最初に、家計改善支援事業の担当者より、経過記録事例1のケース①と経過記録事例2のケース③のご説明をよろしくお願いいたします。

「参考資料：経過記録事例1 ケース①」「参考資料：経過記録事例2 ケース③について【非公開】
＜非公開のため傍聴者退室＞

(平野委員長)

ありがとうございました。

ケース①の資料に記載されている「多機関協働支援会議」から「事例検討会」を経てという、この経緯についてはいかがでしょうか。

(芦屋市社会福祉協議会 三谷)

多機関協働支援会議は、総合相談連絡会という、もともとある会議体を拡大する形でリノベーションした会議体になっております。

その中で、随時型という会議体と、定例型という会議体の2つのパターンを設置していますが、この事例の方は随時型で、個別支援をどのように展開していくのかということ協議するため、この多機関協働支援会議の中で検討をしていただきました。

事例検討会では、精神保健福祉士の先生に来ていただき、「依存」に焦点化した形で、どのような支援を展開するのかについてご助言をいただきました。

多機関の皆様からの様々な視点による助言、そして精神保健福祉士の先生による「依存」に関する視点という両方からご助言いただけたことで、我々困窮チームだけでは見えてこなかった視点をいただき、そのような形で支援が展開していきました。

(平野委員長)

ありがとうございました。よろしければ、つどい場「くろまつ」や「寄ってカフェ」についてもご説明をお願いします。

(三田谷治療教育院 佐藤)

経過記録事例1のケース①の方は、社会的孤立状態にあるということをお伺いし、何かつながるきっかけがあればというところで考えていました。就労準備支援事業の事業利用説明から入るのは入り口として難しい部分がありましたので、「寄ってカフェ」やつどい場「くろまつ」を少しずつご提案させていただきました。

人とつながることやコミュニケーションに課題を抱えておられましたので、まずは「寄ってカフェ」に来ていただき、他の人とお話しすることで、自分の過去のトラウマの共有等、参加者とコミュニケーションをとることができ、「来てよかった」と言ってくださいました。

そこから少しずつ他者と関わる機会が増えていった中で、仕事というところは本人の中で考えていなかった部分ではありましたが、「めーむひろば」の就労体験等から少しずつ意欲が見られ、社会参加にも視点が向いていったと感じています。

(平野委員長)

対象の方が参加されていた、つどい場「くろまつ」の「水やりのみ」について、ご説明していただけますか。

(三田谷治療教育院 佐藤)

つどい場「くろまつ」では、体操等、様々なプログラムがありますが、本人にとっては生活の中で最も大切にしている活動がありましたので、決まった時間、決まった場所に来るということがすごく課題でした。しかし、お花の水やりだけは月曜日、水曜日、金曜日で頑張りたいと本人の中で決めて実行されています。

本来であれば、つどい場「くろまつ」の様々なプログラムに参加していただき、多くの方と関わっていただきたいと思います。水やりから頑張りたいという本人の意思を尊重し、来れる時に水やりをしていただいているので、「水やりのみ参加」という記載になっています。

(平野委員長)

この「水やり」は、この方のために作ったプログラムという理解でよろしいですか。

(三田谷治療教育院 佐藤)

もともと、つどい場「くろまつ」として月曜日に参加者と一緒にお花の水やりを行い、それ以外の曜日は事業担当者が水やりをしていましたが、この方は月水金ということなので、水曜日と金曜日もお花の水やりをしていただいています。

(平野委員長)

わかりました。

引き続き、就労準備支援事業担当者より、経過記録事例1のケース②と経過記録事例2のケース④について、ご説明をお願いします。

「参考資料：経過記録事例1 ケース②」について【非公開】

<非公開のため傍聴者退室>

(平野委員長)

ありがとうございました。

事例の中で出てきた「めーむひろば」について、広報あしやにも出ていますが、簡単にご紹介していただけますか。

(三田谷治療教育院 佐藤)

「めーむひろば」は、コープの店舗に注文したものを取りに行くというもので、コープの店舗で実施されているものです。それを、コープこうべさんと共同のもと、保健福祉センターで実施しています。

日頃、支援員や相談員がいる場所で、安心して就労体験してもらえるような取組ができないかをコープこうべさんにご相談させていただき、実現いたしました。

保健福祉センターで、コープ商品の受渡しや仕分、受け取りに来られた方とのコミュニケーション等をしてもらうような取組が「めーむひろば」で、保健福祉センターでの就労体験になっています。

(平野委員長)

就労体験用に作ったものですか。

(三田谷治療教育院 佐藤)

就労体験用に作りました。保健福祉センターとコープこうべの店舗が近いことから、何かできないかというところで、コープこうべさんにご提案いただき始まりました。

実際に店舗に行くと、お客さんが多く、物量も多いので、急に店舗での「めーむひろば」の就労体験だとハードルが上がりますが、この保健福祉センターで始めると、まずは理解していただいている方に商品を注文していただくことができ、安心して始められるというところで、少しハードルを下げているような感じです。

(平野委員長)

わかりました。山川委員からどうぞ。

(山川委員)

要は、お客さんは一般の方ではなく、保健福祉センターで働く職員が注文して、保健福祉センター内の決められた場所に取りに行くので、少し対応に時間がかかっても大丈夫で、お客さんも見守りながら、働いてもらえるというものになります。

(平野委員長)

すごいですね。

つどい場「くろまつ」の参加が先ではなく、就労を想定した就労体験が先というのは、普通なら「寄ってカフェ」があって、もう少し就労を意識しない順番のような感じですが、むしろ「めーむひろば」が先、つまり就労を本人がしたいという意志が強かったので、このような順番になったという理解でよろしいですか。

(三田谷治療教育院 佐藤)

そうですね。まず「寄ってカフェ」に来たり、順序的には、ゆっくりつどい場「くろまつ」に参加して、最終的には就労体験という方もいますが、この方の場合は、就労体験をするということが先に来て、そこで自分でもできるという自信がついた上で、他の人とも関わることができたところがあります。実際に15年ひきこもっており、3日間だけ働いたけど、すごくきつかったというお話をされていたので、そのようなトラウマを塗り替える意味でも、就労体験で少し自信になったのかと思います。本人からも「すごくそれはよかった」と聞いています。

(平野委員長)

ありがとうございます。では、最後のケース④のご報告をお願いします。

「参考資料：経過記録事例2 ケース④について【非公開】

<非公開のため傍聴者退室>

(平野委員長)

ありがとうございました。

以上4ケースは、困窮の各事業間の連携がこの間に結構進んだということや、あるいは就労体験の事業展開など、充実した成果が出ている感じがあります。

事前資料2にも成果が整理されていますが、その説明も含めて、関係者からもこの4事例の補足について触れていただければと思います。

最後のケース④については、定着支援としてつながっているということですが、最初に相談に来てから、長いスパンを経て本人の手帳取得に至ったということも踏まえて、同じ法人の藤川委員からも、このケース④全体をどう捉えているか、少しお話いただけますか。

(藤川委員)

事業担当者からの説明にもありましたように、最初はお父さんだけが相談に来られて、娘さんのことだという話でした。娘さんはどのような方なのか等、お話をお伺いしましたが、実際にお会いできなかったのが、事業説明だけという形で初回は終わりました。

その後、しばらく時間が経ってから、就労準備支援事業や違う制度につながっていきましたが、つどい場「くろまつ」等に参加している姿を見ると、人と関わるのはもともと好きな方で、仲間ができてくると自分のことを話したり、打ち解けて交流している姿が大変印象的でした。

ただ、実際にその次の「就職」の段階になってくると、やはり不安感がすごく強い方なので、配慮をもらったり準備が必要というところで、手帳の取得や阪神南就業・生活支援センターへのつなぎを整えていきました。

障がい者雇用枠での就職がかなったものの、やはり難しさやつまづいているという話もありますので、そのあたりは、阪神南就業・生活支援センターでもフォローしたり、職員と定期的な面談をして、本人が徐々に自分で気持ちが整理できるような支援を続けているような状況です。

(平野委員長)

少し複雑な質問ですが、就労準備支援事業の受託法人と阪神南就業・生活支援センターは三

田谷治療教育院で同じ法人であり、つどい場「くろまつ」や新しい展開が就労準備支援事業を経て、社会参加推進事業に進んでいますが、それが法人全体に与える影響はありますか。

他の委託事業に比べ、社会参加推進事業は委託料がそこまで出ているわけではない中で、結構労力を使われている感じがあります。恐らく、法人全体としてある理念に基づいて、そのようなことを引き受けているのではないかと認識していますが、法人全体にとってのご感想などはありますか。

(藤川委員)

そうですね。法人自体はもともと障がいのある方の支援をさせてもらっている中で、就労準備支援事業ということで、初めて障がいではない方の支援というところから始まりました。

社会参加推進事業に関しても、法人としては、芦屋市から我々に委託していただいたので、せっかくなのでというところだったと思います。

ただ、「社会参加」という枠組ができたので、障がいのある方の中でも、グレーといわれる方や障がい者枠で働くことに抵抗がある方についても、就労準備支援事業や社会参加推進事業からスタートできますので、法人としてもありがたいと思っています。

(平野委員長)

ありがとうございました。困窮と重層で出てきた参加支援という関係だけではなく、もともとの障がい福祉にも影響があると思いますが、法人自体にとって、事業をすることが既存の法人事業にもいい影響があるということでしょうか。

(三田谷治療教育院 中野)

私は阪神南圏域コーディネーターを兵庫県から委託され、広域の仕事をしております。法人としての考えですが、社会福祉法人が地域の中で、古くから芦屋の中において、いかに地域の方々はどう役立つか、災害も含め、どうすれば社会貢献できるかは、ずっと考えているところだと思います。

この事業は公益事業になるかと思えますし、私の役割としている阪神南圏域コーディネーターも全て公益事業で、しっかりと赤字部門です。

その中でどう付加価値を見つけていくか、地域の方々はどう役立つことができるかの追及を、日々私たちも、法人もしています。

治療教育学は、日々の暮らし、生活を大事にしていくというところで、障がいがある人もない人も必ず日常生活があるので、その日常生活を大事にしていくというものです。日々、向き合わせていただいている利用者の方々に教わっていることもありますし、ケースを通して学び、これからも頑張っていきたいと思っています。

(平野委員長)

ありがとうございました。受託法人として事業を引き受けていただく理由が、行政の委員会でも共有されていない面があり、どうしても一つ一つの事業だけの範囲で見られがちでしたので、社会福祉協議会にとっても同じことが言えると思いますが、これだけこの事業がうまくいっているのは法人の中の連携も当然あるでしょうし、社会福祉協議会等との連携も含めて、様々な観点から困窮の事業評価を共有していただければと思います、発言していただきました。

他にご質問はいかがでしょうか。

中島委員いかがでしょうか。

(中島委員)

芦屋では、経済的な部分と児童虐待はそこまで高い相関はないのではないかとというのが正直に思っているところです。ただ、全国的に見ると相関はあると思っており、一定そこは芦屋の特色ではないかと思っています。私は生活保護の担当をしていた時期もございましたので、その時期においても、あまりその相関は高くないと思っていました。経済的困窮と生活困窮の専門部会に出席するにあたり、どこまで関連性があるのかを疑問に思い、今回参加させてい

ただいています。

(平野委員長)

ありがとうございます。佐藤委員いかがでしょうか。

(佐藤委員)

始めて聞く言葉がたくさんあり勉強させていただいているところですが、やはり学校でもひきこもりや不登校の子がたくさんいます。学校にも、のびのび学級にも、フリースクールにもつながっていない子どもがたくさんいて、そして親御さんも悩んでいます。

このつどい場「くろまつ」や「めーむひろば」等、広報紙も拝見しましたが、様々な機関が関わっていくシステムは、学校にも取り入れていけるのではないかと考えています。

不登校の子が民間の団体で、結構なお金をかけて不登校から学校に戻ってくるような子もいますが、このような取組が学校でも生かせるように、引き続き勉強させていただきます。

(平野委員長)

ありがとうございます。

株本委員、いかがでしょうか。

(株本委員)

障がいの受容という部分で、相談件数も50代が多いというのを実績報告で拝見いたしました。そこに至るまでの長い年月の中で、もしかすると小さい頃から問題を抱えていたということもあるのではないかと思います、やはり対応が早ければ早いほど、社会参加も促せるのではないかと思いますという印象を持ちました。不登校等につきましても、私たちも居場所づくりや市民活動の中で参加したいという相談もかなりありますので、そのような方々の声も拾いつつ、早い段階で対応していけたら、このような状態に至るまでに何とかなるのではないかと思いますという印象を受けました。

(平野委員長)

ありがとうございます。

今のご意見に関係しますので、事前資料2の「課題」の部分について事務局からご説明いただけますか。

(事務局 亀岡)

この課題については、事業全体の一体的実施についてではなく、就労準備と社会参加、2つの一体的実施についての課題になります。2つ書かせていただいているように、潜在的な対象者の掘り起こしや事業の周知、本当に必要な人に届いているのかどうか分からない部分もありますので、今後もそれを継続して実施していく必要があるということと、就労準備の利用にはつながっていないけれど、社会参加のみを目的として参加している方々に対して、何をゴールとして設定するのか、どこまでアセスメントをするのかを整理する必要があると考えています。

(平野委員長)

ありがとうございます。上の問題は少し後で議論したいと思いますが、下の問題は専門的な支援も含めて、どこまでアセスメントできるのかという点は、1つの問題点かなと感じます。この点で、何かご意見はありますか。

三芳委員いかがでしょうか。

(三芳委員)

私も生活困窮者支援に携わらせていただいていたことがありますが、社会参加のみで、次に就労や次のステップを目指しておられない人は一定数おり、芦屋はそのような方のニーズが多いと思っています。

(平野委員長)

それは、先ほど中島委員からもあった、芦屋の所得が比較的高いので、すぐに働かなくても

いいのではないかと、そのようなことでしょうか。

(三芳委員)

おっしゃる通りです。経済的には安定しておられ、何かしら人とのつながりを大切にしておきたいというニーズは一定数あると思っております。そのような方の居場所として、つどい場「くろまつ」や「寄ってカフェ」で支援を継続し続けていくのか、一方で、私は別の会議体である「居場所プロジェクト」に携わらせていただいておりますので、そのような部分で、何かしら他分野と協働しながら、そのようなニーズを賄えるような支援ができないか考えていけたらと思っています。

どこまでアセスメントできるのかについては、今すぐに思いつくところがございません。

(平野委員長)

わかりました。

竹端先生、いかがでしょうか。

(オブザーバー 竹端教授)

基本的に、この4ケースに共通するのは、標準的な時間や空間、秩序、身体感覚からずれている人達の話であるということです。

そこに困窮しているかどうかは関係なく、例えばお金持ちの家庭でも、親が虐待していたら明らかに毒親や教育虐待のようなものもあります。

標準的な時間や空間、秩序や身体感覚のずれが最大化したときに、宗教にはまったり、あるいは借金漬けになったり、家にひきこもったりのような現象が起きているのです。

私たちは、表面的な現象としての宗教依存やひきこもり、リストカット、オーバードーズ等の現象だけを見ますが、表面的な現象ではなく、その背景にあるつながり不足や安心感のなさ、あるいは何か世間や社会や世の中に対する信頼感の欠如等があり、そのため自分が標準的な時間や空間、秩序や身体感覚を持ってない、ずれているというところから端を発して、世界に対する信頼が置けない、普通と言われるものが信用できないという状態に置かれている方々だと理解したときに、普通に返すのではなく、その方がそのような感覚を持ちながらも「生きていいんだ」と思えるような状況や状態をどのように作れるのかという部分が、一番求められているような気がします。

恐らく、三田谷治療教育院さんがされている「治療教育」といわれるものも、世間の枠に戻すのではなく、その人がその人らしいリズムや生き方の中で、どう自分らしく生き直すことができるのかということが問われていると思います。

予算の拠出が困窮から重層になった際に、困窮も関わるかもしれないけど、生きづらさが最大化した人の話だとしたときに、基本的にその人が参加支援を取り戻せるための支援をどうしていくのかという枠組みで見た方がいいと思います。それがたまたま就労につながれば就労でいいと思いますし、就労がゴールではなく、就労も人生の中の一つでしかないので、恐らくコミュニケーションや信頼関係をどう再構築できるのかということが、最大の入り口であり出口だと思います。

そのような意味では、ケース②の「最初に散歩した」は、とても良いと思います。生活リズムに合わせて面談や散歩をするというのは、他者と身体感覚的に関わるということで、その身体的に関われたから、自分の頭だけの世界から出てくることができたのだと思います。

ケース④は、父親が広報番組を見てから1年後に来所されたということがとても大事で、私たちにとっては、見たらすぐ、困ったらすぐに行くものだと思いますが、それは標準的な時間感覚を持っている人の場合であって、しんどい状況の人にとっては、具体的な1つ目のアクションにするために1年の時間がかかるのは当たり前です。異なる時間感覚、空間感覚、秩序感、身体感覚を、どう受け止めていけるかを支援の根本に置きながら、このようなスキームがあると円滑に回っていくと思います。

そこで大事になってくるのが、先ほど三田谷治療教育院さんで出ていた、「なぜこれが赤字なのか」という話で、そこを含めた事業評価、評価というのはあくまでもエンパワーメント評価が前提であるはずで、これにはすごく価値があり、社会貢献として価値があるものが赤字のままでもいいのか、というところまでを評価することによって、よりよく回っていくものをどのように作っていくのかということが、大きな課題だと思います。

伴走支援でも、本人が取るべき責任と、取れるはずのない責任を再定義し直すことが必要で、取れるべき責任と取れるはずのない責任を、本人と一緒に行動しながら少しずつその人の中に落としていってもらうことが大切だと思います。就労し始めて、再び何かにつまずきそうな時に就労と社会参加に断絶が結構大きい気がしていて、しんどかったら社会参加ベースに戻り、いけたら就労ベースに行けるような、もう少し就労と社会参加の間のハードルを低くする、行ったり来たりできるようになるのがいいと思います。就労支援で就労できても、半年後にまた病気が再発して再入院した、というケースをたくさん知っているのも、そのようにならないためにも、就労の在り方の見直しもこのような場で議論していただけたらと思います。

(平野委員長)

それぞれの実践者がエンパワーメントされたという、とても良いご意見をいただきました。

令和4年度までは生活困窮者自立支援推進協議会という形で年3回生活困窮の事業の検討を行っていましたが、令和5年度より多機関協働推進委員会へ改編し、困窮をベースとした会議は年1回となっています。おっしゃる通り、芦屋の特性からすると、困窮にとどまらない会議の事例の扱い方も含めて、就労等の話も一度どこかで議論ができればと思います。

谷副委員長、権利擁護と今までつながりきれなかったという事例から、ケース③の話をご存じであれば、お願いいたします。

(谷副委員長)

権利擁護支援センターの専門相談、経済的虐待が入っているケースですね。

専門相談は、法律職と福祉職の協働型で、当センターで実施している専門相談です。このケースは、個人の債務だけではなく事業の債務もある多重債務で、金額が多額だということもあり、弁護士の方に依頼して専門相談という形で入っていただきました。

また、経済的虐待の虐待当事者側ということで、センターとして経済的虐待の養護者支援も含めて、同時に進めた経緯があります。

このようなケースも数としては少ないですが、虐待の当事者が相談者となり、債務整理などの相談に入っていくというケースになります。

(平野委員長)

家計改善支援事業と権利擁護が関係したケースは、こちらが最初のケースでしょうか。

(谷委員)

ケースで言うと2件目か3件目ぐらいです。

(平野委員長)

わかりました。

もう一点、ケース②の掘り起こしのためのアウトリーチ事業について、相談機関にアウトリーチするのは結構面白い例だと思います。つまり、相談を受けているところにアウトリーチするので、相談の相談ということになります。訪問されたのは、就労準備支援事業という立場ですか、それとも「寄ってカフェ」という立場で訪問していますか。

(三田谷治療教育院 佐藤)

最初に訪問したのは若者相談センター「アサガオ」の「親の会」で、実際に不登校やひきこもりに悩む当事者のご家族に会える機会が少しでもつくれたらという目的のもと、就労準備支援事業の担当として行きました。

何ができるのか、ニーズをまずは知りたいと思い、そこからできることが増えていき、「寄

ってカフェ」やつどい場「くろまつ」などがあることをご相談させていただくと、相談機関の方から親の会に声をかけていただけるようになりました。

(平野委員長)

分かりました。

事前資料2を見ていただくと、「相談」のところに若者相談センター「アサガオ」があり、左側に「ひだまりの会」があります。この事例で言うと、アウトリーチは、ひだまりの会へのアウトリーチと理解した方が正しいということになりますか。

(三田谷治療教育院 佐藤)

「ひだまりの会」は、毎月、自立相談支援事業と一緒に福祉センターで実施しています。年齢層が高く、ご本人も50代のような層が「ひだまりの会」に多く、そのような層のご家族へのアウトリーチになります。

「アサガオ親の会」は、少し年齢層が若い不登校の方等ですので、どちらにも行かせていただいています。

(平野委員長)

両方ということですか。

(三田谷治療教育院 佐藤)

はい。

(平野委員長)

わかりました。先ほど竹端先生からご指摘いただいた点について、就労準備支援事業は確かに枠組みが困窮です。芦屋市の場合、必ずしも困窮という切り口でなくてもいいのではないかという議論がひとつあります。同時に、「就労」は必ずしも福祉のイメージではないところもあるということがいい点です。「働きませんか」というのは、手帳を取ってくださいと言っているわけではないので、「あなたの力を貸してください」のようなところがあるわけです。そのようなハードルの低さを佐藤さんが上手く利用していると感じました。

つまり、働くことが福祉とつながるという話を、逆にあまり表に出さなくても、最後は手帳や困窮という別の条件が付くとしてもつながると思いました。

(三田谷治療教育院 佐藤)

やはり「困窮」という言葉を聞くと、皆さんすごく戸惑われる部分があるので、就労や何か出口の部分を見せると、意欲的になる方もいます。就労と目にする、「まだ自分はそこまで」と言われる方もいるので、それぞれのステップに合わせて少しハードルを下げながら実施しています。

普段から自立相談支援事業のケースも共有していますが、本当に生活に困窮されている方は緊急性があるので、本当は就労準備の必要性があると担当者としては思っている、やはりお金のことを先に解決してからになってしまいます。ご家族の支援や協力を得られて、本人自身に働く力が弱い方が就労準備支援事業に関わってくる傾向があるので、困窮を出し過ぎないようにしている部分が担当としてはあります。

(平野委員長)

事前資料2の「一体的実施のメリット」では、就労準備支援事業は利用登録やプランを立てるなどのハードルがありますが、そこに必ず行かなくてもいい居場所の話や、あるいは就労してから行ったり来たりできるような意味も含めて、社会参加推進事業の持っている一体的実施の可能性について触れていただきました。

「成果」の3つ目に、「寄ってカフェに担い手として関わること」と書いています。「寄ってカフェの担い手」という表現は、「寄ってカフェ」に来ることは、カフェに参加してるという意味も超えて、カフェを維持している、というようなニュアンスだという成果の整理だと思いますがいかがですか。

(三田谷治療教育院 佐藤)

はい、そうです。もちろん「寄ってカフェ」に来て、楽しんでいただくことも一つですが、やはり楽しみながら来るといふより、役割を持って来られるほうが目的意識もあり、就職した後も、「手伝いに行きます」と言っていたいただけます。

(平野委員長)

「手伝いに行きます」という表現になっているのですね。

(三田谷治療教育院 佐藤)

はい、そうです。

(平野委員長)

わかりました。

最後に、コープこうべの「めーむひろば」の事業化は、社会福祉協議会もお金を出しているのですか。

(芦屋市社会福祉協議会 三谷)

お金は出していません。場所の調整等のみ社会福祉協議会でしています。

(平野委員長)

なるほど。この取組はコープこうべが提案されたのですか。

(事務局 吉川)

はい。そうです。こちらは、コープこうべ、三田谷治療教育院、社会福祉協議会の三者でもともとお話があったのですが、「こえる場！」にコープこうべさんが来ていただいている中でお付き合いが始まり、という経緯になります。

実際にお話をいただいた際に、職員向けとは言いながらも職員の福利厚生的に取られてはいけないであるとか、公共施設の中であるというところでの課題も一定ありましたので、実施時間帯等の調整をして実施にこぎつけたというところになります。

開始してから、館全体で25人程度の方にご登録いただいています。対象が福祉センターの中で働いている職員ですので、社会福祉協議会やこども家庭・保健センター、高齢者生活支援センターの職員も登録していただき、この事業に関わっている職員だけということではなく、館全体へ取組をお伝えした上で、協力してくださる方が会員として登録して下さっています。

費用に関しましても、一切出しておりません。全てコープこうべさんの方で人員も配置し、必ず1人はフォローに入る体制も整えてくださっています。

(平野委員長)

開催頻度や時間帯はどんな感じですか。

(事務局 吉川)

週1回、毎週水曜日に実施しています。時間帯は、お昼時間の自分の時間で商品を受け取るということを原則にしております。そのため、お昼前の11時頃から部屋のセッティングや商品の仕分けを行い、12時から1時過ぎくらいまで商品の受け渡しをして、終わった後は少し片づけもしています。

私が説明することではないかもしれませんが、コープこうべの職員さんと事業利用者の方が会話をされる中で、支援者と支援される側という立場ではないような関係性でのお話ができる機会にもなっていて、とても意義があり、貴重な機会になっていると打ち合わせの中でも聞いていますし、コープこうべさんも事業利用されている方の変化が見ていけるといふところが、この事業をしていてよかったと感じてくださっていると聞いております。

(山川委員)

このような形で、就労体験も様々などころからつながる中で、最近では、実際に何か支援したいという企業の方からもご相談いただいていますので、社会福祉協議会としては、そのよう

なお声をつなげて形にできるものはしていきたいと思っています。

掘り起こしをするのと同時に、選択肢のつなぎの部分で、社会福祉協議会は貢献していきたいと思います。

(平野委員長)

ありがとうございます。

事前資料2の表の中にある「地域企業お手伝い」は、そのことを指しているのですか。

(三田谷治療教育院 佐藤)

はい、そうです。協力していただいている企業さんで、ビル前の植栽清掃をする作業があるのですが、無償の就労体験が多い中、労働の対価を大事に思ってくださいっているので、1時間労働すると報酬が出ることでご協力いただいて、地域企業のちょっとしたお手伝いをさせていただいています。

(平野委員長)

ありがとうございました。

他に、議題1で補足はありますか。

(三田谷治療教育院 中野)

竹端先生のご意見が非常に腑に落ちました。事例資料2の課題で竹端先生からご指摘があったように、就労準備支援事業の利用につながらず社会参加だけを目的として参加している人との乖離について、どこまでアセスメントするのかというところではなく、私たちの捉え方、立ち方というところが、とても問われていると思いました。

アセスメントをする相手ではなくて、支援者自身の立ち方にやはり立ち戻らないといけないというのをしみじみと思いました。私たちの中で、普通が基準になっているところからは目から鱗だったのですが、普通に戻すことではなく、その人の暮らしの実現に着目し、就労に対する価値観を再認識していくことがとても大事だと思いました。

(平野委員長)

アセスメントという表現が、標準に近づけるための診断のようなニュアンスに捉えられてしまうため、支援者側が用意する内容をアセスメントするような部分も必要だと感じました。

次に向けてどのようにアセスメントするかのような話にニュアンスとしてはなっているので、そこは先ほどの竹端先生のご指摘も含めて、課題の位置づけとして、次回にそれがどのように進んだのかという議論も当然必要になっていくので、次回への課題の整理として、このアセスメントという表現は少し考えてみたいと思います。

また、アウトリーチという考え方も、先ほど若者相談センター「アサガオ」の親の会のお話もしていただきましたので、両者がつながっていけるようなアウトリーチの手法についても少し考えられたらと思いました。

議題1に大変時間を取ってしまいましたので、残りの議題2については資料にどのようなことが記載されているかについて簡単にご説明いただきたいと思います。

まずは、地域まなびの場支援事業からお願いします。

議事(2) 各事業における令和5年度の実績報告と令和6年度取組について

地域まなびの場支援事業【非公開】

<非公開のため傍聴者退室>

(平野委員長)

ありがとうございました。

引き続き、自立相談支援事業について、お願いします。

(社会福祉協議会 三谷)

事業の報告は資料に全て記載しておりますので、2点だけご報告させていただきます。

まず、居住支援を今後どのように進めていくのかが、非常に大きな課題と思った一年でした。強制退去や家賃滞納、高齢者世帯と高齢者を含む世帯で、経済的に困窮している世帯が非常に多くご相談に来ていただいておりますので、この高齢者の貧困問題というの、非常に大きな問題になってくると感じています。

2点目は、社会参加や、就労準備など、各事業を進めるにあたり、本日配布しました資料で、「Y O A K E」という機関誌を作成いたしました。各事業の受託法人がそれぞればらばらですので、事業単体で考えてしまうと事業を提供するような意識になってしまうことから、そうではなく、生活困窮のチームとしてどのようにお困りの方に支援提供できるかということで、一体的に見えるように作らせていただきました。

機関誌の中の「やってみた」というのは、先ほどのケース②の方がおっしゃっていた言葉で、動画も作らせていただきました。ご本人が私たちをどのように見ていたのか、どのようなチャレンジの気持ちだったのか、そのようなことも聞きながら、私達のしていることを皆さんに評価していただくような視点も持ち合わせて、これからも頑張っていきたいと思います。

(平野委員長)

ありがとうございました。本日、動画はありますか。

(社会福祉協議会 三谷)

本日はありませんので、次また準備します。

(平野委員長)

わかりました。

お時間ありませんので、最後に就労準備支援事業と社会参加推進事業についてお願いします。

(三田谷治療教育院 佐藤)

就労準備支援事業ですが、具体的な数字等は、事前資料1に報告書載せておりますので、またご確認いただければと思います。昨年からは、「Oneすてつぶあしや」という愛称やロゴマークなどを周知しています。

先ほどの自立相談支援事業の説明でもありましたとおり、「ひきこもり・不登校からの一歩～家族とともに～」の講演会では、事業利用者の方にインタビュー動画へ実演していただきました。

また、保健福祉センターでの「めーむひろば」を経て、3名の方が就職に至りました。「相談支援体制の機能強化」のところでは、自立相談支援機関や関係機関と連携することで、6件の新規本事業利用者の増加につながりました。

・つどい場「くろまつ」拡大版の写真を投影

今映し出している写真ですが、つどい場「くろまつ」の拡大版として、地域の珈琲屋さんを講師にお招きして「美味しい珈琲の淹れ方講座」を開催したときのものです。ひきこもり当事者や、元ひきこもりの方などにご参加いただき、得意や自信が身につけられるようにレクチャーしていただきました。そして、そこで学んだ参加者に「寄ってカフェ」で珈琲を淹れる担い手として活躍していただきました。実際にコーヒーの温度や量などを教えていただいてメモし、時間やグラムもきっちり測られて、「寄ってカフェ」に来店された方に対して丁寧に淹れていただきました。

私からは以上になります。

(三田谷治療教育院 山際)

社会参加推進事業について、ご報告させていただきます。事前資料6をご覧ください。就労

準備支援事業と一体的に実施していることもあり、説明箇所が重複する場所があります。

「地域での居場所・役割」については、これまでも話が出ていましたとおり、つどい場「くろまつ」や「寄ってカフェ」を定期的実施しており、実施回数や延べ人数は記載のとおりです。実際につどい場「くろまつ」や「寄ってカフェ」に通うことで、外出の習慣が形成されたり、就労体験から就職に至るかたもいらっしゃいました。

課題としては、外出すること自体が難しい人や、ご家族以外の方と関わるのが難しい方へのアプローチ方法になります。

「周知・啓発」ですが、就労準備支援事業に「Oneすてっぶあしや」という愛称を作り、ロゴマークやポロシャツ、エプロンを作成しました。ポロシャツやエプロンは「寄ってカフェ」の際や植栽作業の時に着用して実施しております。着用することで、チーム意識が芽生えたり、外部の方への活動の周知になったと思います。今年度は、7月に開催したひきこもり相談会の講演会后に、会場で「寄ってカフェ」を実施しました。

「就労支援」では、「めーむひろば」やつどい場「くろまつ」を定期的実施しています。企業とのつながりも強固になっておりますので、次のステップにもつなげていきたいと思っています。

今年度から実施している「相談支援体制の機能強化」では、地域のファミリーサポートセンターやボランティアグループ、ボランティア団体へ「めーむひろば」の周知や活動の説明をしております。

また、阪神南障がい者就業・生活支援センターの会議や総合相談連絡会等、参加可能な会議体に参加し、連携を図るようにしています。

課題ですが、この社会参加推進事業はグレーゾーンの方など対象を問わないところがあるものの、障がい分野との連携が多くなっており、今後、地域包括支援センターの高齢分野や家庭児童相談、児童分野との連携も図っていく必要があると思っています。

以上です。

(平野委員長)

ありがとうございました。時間の関係で、家計改善支援事業は省略させていただきます。

最後に、様々な事例を基に、民生委員の山本委員と職業安定所の新妻委員からご発言いただければと思います。

(山本委員)

民生委員は、赤ちゃんから高齢者までの相談を受けていますが、受けた相談をつなぎ役として、社会福祉協議会や他機関へ相談受渡しをしており、様々な問題を抱えた方の相談があります。

「福祉を高める運動研究会」では、各民生委員が持っている支援が必要な世帯の事例などを関係部署の方に来ていただいて情報共有を行っており、年に1回、190件程あります。各関係部署から来ていただいていることで、分からないことをその場で聞くことができとても助かっています。

(平野委員長)

今日の4つの事例で、民生委員さんの集まりで話したらいいものはありましたか。

(山本委員)

そうですね。全て話したいと思っています。

(平野委員長)

ありがとうございます。

就労とも関係すると思いますので、新妻委員、ご感想等がありますか。

(新妻委員)

ハローワークは、生活困窮の方の就労支援という形で関わらせていただいておりますが、そも

そも本日のお話を聞いていると、個々の方の様々な事例がり、ハローワークというどうしても既にある求人の中から支援をすることになります。就労と社会参加のはざまのような方が多い中で、このような問題にどう関わられるのかを考えながらお話を聞かせていただきました。大変参考になりました。

(平野委員長)

ハローワークの場合は、就労体験のようなものは守備範囲には入らないという理解でよろしいですか。

(新妻委員)

一人一人に合うような考え方ではなく、どちらかといえば事業所寄りですので、事業所に応募が少ないことから、インターンシップ型で実施するというケースはあります。

(平野委員長)

インターンシップ型になるということですね。

(新妻委員)

専門援助の障がい者の部門であればまた別ですが、私の部門は「一般就労」ですので、なかなか就労体験にはなりません。ただ、一般就労の窓口に来られる方でも、グレーゾーンの方はたくさんいらっしゃいます。そのような方に対して、手厚いことをしている自治体はなかなかないと思います。

こちらでは直接的に対象の方を自治体におつなぎすることはできませんので、西宮若者サポートステーションという就労前段階の方向けの機関へフィードバックをして紹介することはありますが、実際、本当は細かい一つ一つの積み重ねの先に、就職があるのだろうなと思いつつながら、お話を聞きました。

(平野委員長)

ありがとうございます。何かつながることができればと思いました。

最後に事務局から何かありますか。

(事務局 亀岡)

本日は活発なご議論いただきまして、ありがとうございます。

先生との打合せの中でも出てきましたが、今回の専門部会が、多機関協働推進委員会の部会という位置づけであり、多機関協働推進委員会の前身からも分かるように、元々は生活困窮の方を対象に支援を考えてきたところからプラスして、社会との関わりに悩みを持つ人も含めて、様々な人を支援できるように枠組みを広げてきたものが社会参加推進事業ですので、自立相談、就労準備とも共同して実施することで、重層的な支援体制の整備につながってきているのではないかと考えています。

(平野委員長)

本日のお話のように、芦屋の地域特性を鑑みて、生活困窮だけに留まらない支援等専門部会にする等、名称の修正や手法は色々あると思いますので、12月の多機関協働推進委員会でまた検討いただけたらと思います。

(事務局 吉川)

ありがとうございました。

次回は、12月頃に実施できたらと思いますので、日程が決まりましたら改めて事務局からご連絡させていただきます。

本日はお忙しいところ、ありがとうございました。

閉 会